

かされ、着いてみると、これが同じ空港の国内線の建物かと思われるような鉄骨丸出しの大きな倉庫で、床は殆どが土間、台貫計りで荷物を計り機内預けとなります。このカトマンズは盆地の霧が発生しやすく、8時の出発時間に近づくにしたがい霧が濃くなるばかり。遅れるアナウンスもないらしいのですが、ガイドのベックは慣れたもので昼迄には飛べますよとコーラを買ってきて、これでも飲んで待ちましょう。

そう言えば旅行社の担当が言っていたのを思い出した。ネパールの交通機関は動いてよし、着いてよしと思って下さい。特に山に入ると時計はしまい込んで見ないほうがこの旅は楽しめますよと言っていたことが早くも分かって来た感じで、もう急ぐのはやめよう。成り行きにまかせてみよう。これから先この習慣はもっと現実的になってくるだろうから。とは言うものの帰国の日程に間に合わなくなったら、しかし死ぬような事はないだろう。自分で自分に言い聞かせてはみたものの、早くも文化の違いを感じました。

約2時間後の10時近くになり、まだ霧が立ち込めている中、離陸し、この国第二の都市でリゾート地でもあり、湖のほとりにあるポカラに向けて30分、ヒマラヤの峰々を眺めながらの空の旅、ポカラ空港に着くと、ここはもうアンナプルナの麓、見上げるばかりの山また山、近くには登ることが許されていない神の山7000mのマチャブチレが迫っています。ここでポーターにリュックを預け3人となり、タクシーで登山口のナヤブルへ、又このタクシーが悪路にもかかわらずスピードだけは高速道路並、揺れる為つかまるにも取っ手は壊れてなし、ほこりが入るので窓を閉めようにもハンドルはなし、古いのがとりえのポンコツ車。やっと着いたナヤブルで昼食をとり、1000ルピーの入山料(外国人のみ)を払い、いよいよ自分の足で3400mの高地に向かって登り始めます。登山道と言っても地元の人達にとっては村から村への生活用道路かも知れませんが、道の脇には3~4mもあるハイビスカスやブーゲンビリアの花が、しゃくなげの大木(4、5月頃は見事に咲くそうです)の間に咲き乱れ、美しい道がつつら折りに上へ上へと向かっており、足元はと言へば一見大理石かと思われるようなテーブル模様の板状の石が、ランダムに階段状になっていて一歩一歩歩幅の違う階段を上る感じの道でしたが、標高



が上がるにしたがい砂利道に変わってきます。途中の村に着くと日本のミルクティのようなネパールティを1杯20円程で飲み、一休みしながらの山登りです。泊りの山小屋はお世辞にも立派とは言えませんが、隙間だらけの板張りの個室に木のベッドが二つでも一人で寝るには十分な広さと言えます。何軒もある山小屋の建物はカラフルに塗られていて、濃紺の空に合わせるかのような青い屋根に、赤の壁や黄の原色が塗られていますが、廻りの花や木々に調和して明るく感じられます。人々はトレッカーに慣れているようで向こうからあいさつをしますが、私が日本人か中国系か判らないようです。お客は欧米人が多いようで英語で話し掛けてもきますが、私はチンプンカンプンで適当に相槌をする始末。

食事は、主食はダルパートと言って大豆の砕いたものが入っているカレー味のスープに米飯、野菜の漬け物。これを全部かけて右手で混ぜて指でつまんで食べる。ナイフ・フォークは不用な所です。他にインド風のナンに似たパンやじゃがいもの煮物等、色々ありますが、左手はトイレで洗う時に使用します。

こんな生活をくり返しながら昼は7000~8000m級の氷の山々を見上げ一日歩き、夜は満天の星をながめ、空一面の銀河の中に大きな明るい星のシチュエーション、光の少ない大地から一大天体ショーを堪能することが出来ました。幸天候に恵まれ晴天続きの9日間行程でしたが、数日とは言え時間を気にしないゆったりとした生活がなつかしく感じられます。ちなみに山の中では肥満なネパリーには一度も逢えなかった。

